

き込まれているというように、パラドックスを外部化するような立場を取っていると思われる。

この2つの方向の違いはそれぞれ一長一短がある。前者の内部化の方向においては、教育の固有性が生かされ、深化するという期待が持てる。その反面、その姿勢は、ドイツ教育学において繰り返されてきた「自由／拘束」という二律背反パターンの焼き直しにとどまる恐れもある。また、そこでは教育システムが他のシステムと交わすコミュニケーションが十分に分析できないのではないだろうか。これに対して、後者の外部化の方向においては、教育システムが外部環境としての他の社会的システムやパーソナリティ・システムと形成する新たな関係を探ることができよう。教育社会学の視点に立つ者はこの方向に近縁性を感じるかもしれない。その反面、この方向はパラドックスから発する葛藤の負担を外部に転嫁してしまう恐れがある。

パラドックス処理の問題と関連して、教育社会学としてもっと深めて考察して

■ 書 評 ■

山田昌弘 著

『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』

筑波大学 飯田浩之

本書は、巷の家族論によくある理想論を排して、「家族のありのまま」を描くことを目指して書かれたものである。そして、その意図通り、本書には「近代家族」が抱える宿命的な「危うさ」、そしてそれ

もらいたかった点は、実証主義との関係についてである。加野論文は教育のパラドックス性を示すことの意義の一つが、これまでの教育社会学の合理主義的な政策科学志向に反省を促すことにあると言う。たしかに、すでに述べた様々な行き詰まり現象は、外挿法的なアプローチでは解けない問題を提起している。しかし、その問題について、教育のパラドックス性を指摘するだけでは教育社会学の思弁性を強めることになりはしないか。教育社会学における新たな方法概念として「パラドックス」を位置づけ、そこから現実的な指針を引き出すという新たな課題がここに提起されていると思われる。

所属する大学（学派）や研究室の垣根を越えた日常的な交流の中から生み出された本書は、それ自体これからのオートポイエティックな研究ネットワークのあり方を指し示していると言えよう。

◆四六判 262頁, 2300円

東信堂

を回避すべくしつらえられた装置、現代の家族が「近代家族」の装いをしているがゆえに直面している「ゆらぎ」が「ありのまま」に描かれている。著者の手により糖衣をはぎ取られた家族の味は苦

く、後味が悪い。しかし、その苦さを味わった後で現実の家族のありようを見ると、それが一層リアリティーを増して見えてくる。

近代家族をみる著者の視点は極めて明快である。著者は「近代家族」を「家族責任の負担」という視点からみる。近代家族は公的領域から切り離されて成立した私的領域である。そしてそれは、一つには成員の生活水準を確保し、労働力を再生産する責任を、また今一つには、成員の感情をマネージして不満を外部に漏らさない責任を負っている。2つの責任をあくまでも家族の中で果たそうとするのが近代家族だというのが、著者の「近代家族」に対する見方である。

では、このような見方によって近代家族の何が見えてくるのか。著者がそこにみるのは、近代家族の構造的な「危うさ」である。個々の家族あるいは個々人がその「責任」を果たすこと、それ自体は「公」からの自立を旨とする近代社会のあり方からみて理に適ったことである。しかし、その理に適ったことそれ自体が、近代家族に「危うさ」をもたらしている。近代家族はその責任をあくまでも家族内で果たそうとする。為に、責任を過剰に負ってしまう。また、責任を果たせる家族と果たせない家族、家族内における責任の負担者とその受益者との間に格差を生みだしてしまう。過剰な負担と近代の「平等原理」に違反する格差——近代家族は、もともと足元を掬われる運命にある。このように、著者がみるのは、近代家族の「近代家族」であるがゆえの「危うさ」——パラドックス——である。

実際、本書を興味深くさせているのは、著者が徹底して「近代家族のパラドックス」にこだわっている点である。「近代家族」そのものがそのものに「ゆらぎ」をもたらす、その仕組みの解明がなされている点である。なかでも、そうした著者のこだわりが遺憾なく発揮されているのが、近代家族の「イデオロギー装置」についての分析である。

著者は、近代家族にはある種のイデオロギー装置が用意されており、その装置によって内包する「危うさ」が回避されているという。著者の言うイデオロギー装置とは、「愛情」と「家族責任」を結びつけて語り、規範化したものである。「責任の負担は愛情の表現」「家族ならば愛情が湧くはず」——このようなイデオロギーに支えられて、家族は負担者に不満を感じさせることなく最大限の責任を負っている。つまりは過剰な負担と格差を隠蔽できている、というのである。

だが、著者の分析はこれにとどまらない。「愛情と家族責任を結びつけて語り、規範化すること」が、逆にいかに近代家族を「危うく」するかを解き明かす。よりよき家事を愛情の証とするイデオロギーは、女性は情緒的存在とする今一つのイデオロギーと相まって、女性を家事に向かわせる。育児を母性愛の現れだとするイデオロギーは、母性愛は本能だとする別のイデオロギーと相乗して、母親を育児に向けて駆り立てる。「愛情イデオロギー」によって育児も家事も意味を与えられ、女性はそれを背負い込む。しかし、元来、「愛情」などというものは量る基準のないあやふやな代物である。量